

## 大和の春の雪

辻 憲男（文学部教授）

「この日、大和平野には、黄ばんだ芒野（すすきの）に風花が舞っていた。春の雪というにはあまりに淡くて、羽虫が飛ぶような降りざまであったが、空が曇っているあいだは空の色に紛れ、かすかに弱日が射すと、却（かえ）ってそれがちらつく粉雪であることがわかった。寒気は、まともに雪の降る日よりもはるかに厳しかった。／清頭（きよあき）は枕に頭を委ねたまま、聡子（さとこ）に示すことのできる自分の至上の誠について考えていた」。俣（くるま）を呼んで、月修寺へ走らせた。「空が水のように白んでくると思うと、そこから稀薄な日がさしてきた。雪はその日ざしの中で、ますます軽く、灰のように漂った」（三島由紀夫『春の雪』）。

文学を読む愉しみの一つは、こうした明晰な表現に出会うことである。人物やストーリーもさることながら、文章こそが作品の生命である。水滴のような淡雪は、わたしも幾度か出くわした。奈良盆地の早春はまさにこのとおりだ。小説の最後、この光景の挿入が、主人公の悲劇と運命を暗示する。

聡子は尼寺に入り、髪をおろしたのだった。「後悔はいたしません。この世ではもうあの人とは、二度と会いません。お別れも存分にしてみました」。清い、ゆるぎのない声であった。清頭は帯解（おびとけ）の町に宿をとり、何度も面会を乞うたが拒絶された。逢わさないのはみ仏の取り計らい、とも老尼は答えた。王朝の物語を思わせる結末である。そして清頭の「夢日記」が、親友・本多の手にわたった…。



奈良市山村にある尼門跡、円照寺。作中の月修寺。  
61年後、聡子は清頭を知らぬと言った（『天人五衰』）。